プロローグ「世界を守るもの」

――――無限ともいえる広さを持つネットワークの世界。

日々、大量のデータが行き交い、その複雑さを増していくネットワーク世界では、あまりにも肥大化したデータ領域が分離され、個別の世界が生まれることもあった。

そんな世界の一つに、『ゴースト』と呼ばれる存在が住む『伺か』という世界がある。

その『伺か』世界の片隅で、今日も一つの戦いが繰り広げられていた。

そこは、人為的に作られたとしか思えない空間だった。地面には、無機質な模様が延々と描かれており、見ようによっては、巨大な電子回路のようにも見えなくもない。

空を見上げれば、確かに青空は広がっているものの、浮かぶ雲はなく、まるでペンキで書いたように鮮やかな青一色に染まっている。

いかにも人工的な電脳空間の中で、一人の少女と不可思議な生き物が、周りを取り囲む触手と戦っていた。

「とおっ！」

気合の声と共に、少女は手にした日本刀で横薙ぎの斬撃を放つ。

次の瞬間、少女の目の前にあった触手が数本まとめて切り倒された。

軽やかに日本刀を操り、触手を次々と斬り倒していく少女は、その無機質な空間とは対照的に、明るく可愛らしい姿をしていた。

歳は十代前半といったところだろうか。ボブカットにした青い髪と大きな青い瞳が特徴的だ。そして、身にまとっている服も一風変わっている。

白と青を基調にし、エプロンドレスを動きやすくアレンジしたような不思議な服装ではあるが、青い髪を持つ少女の明るい雰囲気と相まって、とても元気で快活な印象を受ける。

彼女こそ、『伺か』世界の原点ともいえる『マテリア』の現デフォルトゴースト『さくら』である。

しかし、この『伺か』世界では、デフォルトゴーストの座からは退いたものの、初代デフォルトゴースト『さくら』も健在であり、混乱を避けるために『御影さくら』と呼ばれる事も少なくない。

「うにゅう、そっちは大丈夫？」

日本刀を持った少女――――御影さくらが、隣に寄り添う青色をした不思議な生き物に声をかけた。

うにゅうと呼ばれた生き物は、両手に拳銃を持ち、迫る触手を撃ちまくっていたが、その姿もまた特徴的だった。

青色をした丸い体から細い手足が生えており、その頭

には鶏のとさかのようなものが突き出ている。
全くもって不思議な生き物と言うしかない存在ではあるが、彼こそが、御影さくらの相方を務め、絶えずサポートを続けるナイスガイ(?)、うにゅうである。
その手でどうやって持っているのか分からないが、うにゅうは両手に持った拳銃で、次々と迫る触手を撃っていく。
「さくら、そっちのほうはどうなんや?」
「うん、あらかた片付いたよ」
迫る触手を鮮やかな剣技で打ち払いながら、御影さくらが答える。
一見して、御影さくらの剣技には無駄がない。
前から迫る数本の触手を横薙ぎに払ったかと思うと、今度は軽くステップを踏み、横から迫ってきた触手をかわす。次の瞬間には、体をくるりと回転させ、後ろにいた触手を一気に切り伏せる。
一連の動きには全く淀みがなく、まるで剣術の演舞を見ているかのように思えてくる。
そのうちに、御影さくらとうにゅうを取り囲んでいた触手は、数える程に数を減らしていた。
「あれが『邪』の本体だね」
御影さくらが動きを止め、数十メートル離れた場所にある樹木のような物体を見据えた。

御影さくらが『邪』と呼んだもの、それは一見すると枯れた樹木のように見えるが、近づいてみれば、植物とは全く異質な存在だという事が分かるだろう。中心に紅く輝く水晶のような核を持ち、ドロドロとした粘液に包まれた異形の生命体――それが『邪』である。
今まで御影さくらとうにゅうが戦っていた触手も、『邪』の端末に過ぎない。
『伺か』世界に限らないが、ネットワークの世界にはいろいろな想いが絶えず交錯している。その殆どは、『伺か』世界に住むゴーストにとって好ましい想いなのだが、中には邪な想いが紛れ込む事もある。
そうした邪な想いが何らかの理由で、『伺か』世界の中に実体化することがあり、ゴーストたちはそれを『邪』と呼んでいた。
実体化したばかりの『邪』は、ゴーストにとって、そんなに大きな脅威ではない。ある程度の力があれば、簡単に消滅させる事が出来る程度だ。
しかし、長い時間、邪な想いを蓄積し、大きく育ってしまった『邪』は簡単に消滅させる事が出来ず、逆にゴーストが取り込まれてしまう可能性すらあった。
そうでなくても、『邪』が攻撃の手段として『触手』という形を取るのは、女性のゴーストが多いからだという説もあり、ゴーストの安全のためには放置しておく訳には